

# かささぎ 通信 第51号

2016年12月9日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年十一月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年12月号初出の『とんび凧』（『森三郎童話選集 夜長物語』所収）と「つまらない日」を読みました。

今回は二作とも年の離れた兄弟・姉妹の話でしたが、『とんび凧』についてまとめます。

「とんび凧（童話）」（森三郎）は、兄さんの永二と年の離れた弟の和雄の話です。永二は親戚に行った帰りに、前からほしいほしと言っていた小さな地球儀と、和雄のとんび凧を買ってくるはずでした。夕暮れの景色の中、なかなか帰ってこない兄を待つ弟の描写は、『赤穴右衛門兄弟』の書き方と同じです。『赤穴右衛門兄弟』は昭和6年3月号の『赤い鳥』に茅原順三名義で掲載された、森三郎初めての作品です。菊の節句の日に必ず戻るといふ兄の言葉を信じて、外に出て兄を待つ弟の姿と、「とんび凧」の弟の姿を比較してみましょう。

「赤穴右衛門兄弟」には、こんな表現が見られます。左門は門口へ出て、こちらへ向って来る侍姿の人を遠くから見て、おや、お兄さまかなと、おもったことが二度や三度ではありませんでした。（中略）

「もう、うちへおはいりよ。」と、母人は言ひました。「もう今日はかへりはしませんよ。ごちそうはあすまでおけるんだし、もうはいって、ごはんをおたべなさい。」どうぞ、お母さま、さきにめし上がって。きつと、かへって見えますよ。」（中略）

月が出ました。左門は、そのしみじみした光をあびながら、いつまでも、門口に立ってゐました。

同じような表現を「とんび凧」から引用します。

「さあ、和雄ちゃん、もうご飯ですよ。」

「今すぐ・・・」

「どうしたの、和雄ちゃん。もう兄ちゃんも帰っちゃいませんよ。」  
鳥が二羽、鳴きもしずに山の方へとんでいって、やがて紫色の空へとけこんでしまひました。ふと山の上にはぼつりと黒い点が浮かびました。「あ、兄ちゃんかしら？」（中略）

場面は似かよっていますが、森三郎は「赤穴右衛門兄弟」から三年六ヶ月後に、時代を現代に移し、兄弟の互いに相手を思う気持ちを素材に、「とんび凧」という新しい物語を書こうとしています。

兄の永二は、文房具屋さんと万年筆が欲しくなっていて、そちらを買ってしまい、弟の凧を買えなくなってしまいました。しかし、凧を待っている弟のことを思うと、気がとがめ迷っているうちに、帰りがすっかり遅くなってしまったのです。この時、お母さんはさぞ心配したでしょう。でも、泣いて説明する永二に「いいのいいの、泣かなくていい」となだめます。そして翌日の日曜日に、もう一度文房具屋さんへ行って「とんび凧」を買ってきてやるように永二に言うのです。

「赤穴右衛門兄弟」と同じく、弟は無邪気にひたすら兄を待ちますが、「とんび凧」では、少年の微妙に揺れ動く心理をテーマの中心に据えた童話になっています。これは森三郎が自分で切り開いてきた三郎童話の特徴です。

「読む会」の当日、お母さんの永二に対する態度も話題になりました。永二を頭ごなしに叱ったり、問いただしたりしなかったことが、永二の気持ちを救ったことでしょうか。森銑三さん・三郎さん兄弟のお母さんの姿が彷彿されます。

次回予定 平成29年1月13日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和10年2月号「母さん」、4月号「けんか」、

5月号「牛公」（それぞれ初出作品）